

小学校で子どもたちが喜んで取り組む環境学習の展開法について

岸本 清明

(加東市立公立小学校元教諭、「人と自然の博物館」地域研究員)

はじめに

海洋汚染や地球温暖化など様々な環境問題が生起し、小学校段階から環境学習に取り組む必要性は増している。しかし、各小学校の環境学習はなかなか進んではいかない。その原因は複合的である。その一つに各教科の指導内容の量が多いうえに、英語や道徳教育の内容が強化され、プログラミング教育が新たに追加された。そのためカリキュラムが過密化し、教員に時間的にも精神的にも余裕がなくなることがあげられる。環境学習に限って言えば、まず総合的な学習の時間数が減ったり、その時間が他教科の補充や行事の準備などに使われたりして、環境学習に使える時間が減ったことである。それに、教員の環境学習の題材選択が悪かったり、展開方法が不適切だったりして、子どもたちが喜んで取り組まないことがあると考える。

私は幸いにして「ゆとり教育」の時期であった1998年から10年あまり、主に総合的な学習の時間を用いて、下記のような主題で環境学習を年間70時間ほど展開することができた。その過程で、子どもが環境問題に興味を持ち、環境学習に進んで取り組む方法を、子どもから教えてもらった。今回それを報告し、各小学校で環境学習を展開する際に参考にしてほしいと考える。

題材の選択について

子どもたちの身近にあり、子どもたちの追究可能なものを一つ選ぶ。

- 「うまい水が飲みたい」(6年生)1998…水道水がまずいのは東条川が汚れているからだと思いき、洗剤などの使用を減らしつつ、川のクリーン活動をして、その浄化を地域に呼びかけた。
- 「ホテルいっぱいの東条川に」(3年生)1999…東条川にホテルを呼び戻そうと、ホテルの生態やその棲める環境を調べた。それを記した「ホテル新聞」を全戸配布し、自作劇で訴えた。
- 「魚たちと見た東条川」(6年生)2000…東条川で魚を釣り、捕った。地域の人から「昔と比べて魚が減っている」と聞き、その原因を調べた。それは外来魚の増加と水の汚れだった。
- 「水生生物から見た東条川」(3年生)2001…東条川で水生生物調査をし、きれいな川と汚れた川両方の指標生物を見つけた。夏休みの家族旅行に、各家庭で他県の川の水を採取してもらった。それらを電気伝導度値などでランキングした。東条川は汚れがひどい方に入った。
- 「東条川物語」(3年生)2002…水生生物は魚の餌にもなり、豊かな川を支えている。「川は人のものではなく、水生生物や魚のもの」である。人形劇や音楽でそれを表現する活動をした
- 「鳥の詩」(6年生)2004…バードウォッチングを4回した。山や川、水田にたくさんの野鳥がいた。それは良い環境があるからだ。野鳥新聞を作り、そのことを地域に知らせた。
- 「サワガニと見た鴨川の川」(2・3年生)2005…鴨川のどこにでもサワガニがいる。下流の東条川にはいない。川が汚れるとサワガニはすめない。そのことを人形劇で地域に知らせた。
- 「酸性雨を軸にした『水溶液の性質』」(6年生理科)(5・6年生)2007…アサガオの赤斑から酸性雨に気づく。酸の力を実験し酸性雨の被害状況も調べる。それを弱める方法がないか調べる。アルカリで中和できることや、弱い酸やアルカリを生活に生かしていることも理解する。
- 「魚たちと見た鴨川の川」(5・6年生)2009…おじいさんの子どもの頃、お父さんの子どもの頃、今とを比べると、魚の種類と量が半分以下になっている。その原因は洪水防止と乾田化の工事だ。人のための工事が魚たちを苦しめている。そのことを人形劇で地域に知らせた。
- ☆「開魂園の竹やぶは病気で」(3年生)2010…学校林の竹やぶには枯れた竹が多い。その原因を調べると手入れ不足だった。自ら間伐をし、切り出した竹で一輪挿しや竹炭を作った。

○は加東市立東条東小学校、□は鴨川小学校(へき地校で複式学級有)、☆は東条西小学校

追究の方法について

- ① 最初に体験活動を十分する。そして、発見したことや疑問に思ったことを記録していく
最初の体験活動が大事で、そこに十分な時間をとることが必要である。その中で、以後の学習を展開していく際に必要な情報を得たり、興味を持ち始めたりするからである。体験は未分化な学習であるが、みんなで学習を深めていく内に、その体験がその子なりに整理されていく。
- ② 諸発見をみんなで共有しながら、その疑問の中から子どもたちと学習課題を作る
子どもたちの発見を発表させると、自分も同じことを考えていたとか、そういう見方があったのかとか、子どもたちに共感や驚きが生まれる。そして、疑問を整理していくと、子どもたちが答えを考え出すのもあるし、自分たちの力では解決できないなどと思うものも出てくる。
- ③ 自分たちで追究可能な課題については、自分たちで調べ解決する
子どもの手に合う疑問は話し合いの中で解決していく。班で調べさせるのも有効である。
- ④ 主要な課題については時間を十分に確保し、できるだけ全員で一つ一つ追究していく
環境問題の本質につながる問題については、クラスみんなで追究していく。その際に追究していく順番を熟考すること。解決順を間違えると、子どもの思考が混乱してしまう。
- ⑤ 子どもたちの手に余る課題については保護者や地域の人と話し合い、解決方法を探る
いきなり専門家を呼ぶのではなく、まず保護者や地域の人に話を聞く。すると、彼らが地域のことを大切に思っていることが、子どもの心に響く。また専門家の話を受け止めやすくなる。
- ⑥ 最終的には専門家や行政の人の指導やアドバイスを受け、解決方法を見出す
専門家は本質に迫る話をしてくれる。そして解決法もアドバイスしてくれる。そのことで、子どもたちは専門家にあこがれと尊敬の念を抱く。そして、学ぶことのすごさを知る。
- ⑦ 自分たちの思いを様々に表現する
この学習を展開していくうちに、みんなに伝えたいと思ったことがたくさんできてくる。それを、プレゼンや演劇、新聞やビラ、ポスターなどの様々な方法で多くの人に伝える。
- ⑧ その解決に向けて自ら動くとともに、多くの人に参加を呼びかける
環境学習の最後には何らかの行動をする。それをすると、他学年の児童や地域の大人までも参加してくれるようになるからだ。
- ⑨ 後に取り組む人たちのために、実践記録を残す
子どもたちとの一年間の学びを検証するためにも、後に取り組む人たちのためにも、実践記録を残すことが大事である。保護者に配布したり、他の教員や研究者、実践家に渡したりするとアドバイスがもらえる。

学習の効果について

子どもたちは、体験や追究活動、表現活動におもしろさや楽しさを感じる。そして、課題を作り、どうすれば解決するかを考え、それを展開していくうちに問題解決の方法を取得できる。と同時に主体性も育っていく。

また、子どもたちがそれぞれの特技を生かし、自分たちの思いがより伝わるよう工夫し合う中で、表現力が育まれる。それに学習の過程で友達一人一人の良さに気づき、良いところを真似したり、尊敬しあったりするようになっていく。すると、学級がまとまっていく。

一方、地域や行政の人、専門家が教室に入り交流し、質疑を重ねる過程で、子どもたちのコミュニケーション能力が培われる。さらに、地域の環境問題の一つを保護者や地域の人と共に解決しようとして相互に働きかける中で、社会性も育っていく。

このように、楽しく学んでいく環境学習は、環境のための教育ではない。子どもたちや地域の

未来をも創る人間教育そのものなのである。

(参考 岸本清明著「希望の教育実践」2017年 同時代社)